

江戸時代、弘前藩は、領内外における商品流通が盛んになるにつれ、領内の流通や運輸機構を整備し、物資・人・情報などを統制するため、九浦制度を設けた。この制度は、領外との

入口と出口を9か所に限定し、その商人に流通を独占させ、役銀（通関税）を納めさせる方式だった。九浦とは鯨ヶ沢・青森・深浦・十三・蟹田・今別の6つの湊と、碓ヶ関・野



天童山公園に設置された鯨ヶ沢城跡の標柱。背後は鯨ヶ沢港＝鯨ヶ沢町教育委員会提供

内・大間越の3つの関所の総称である。このうち鯨ヶ沢と青森は「両浜」とよばれ、領内の米を江戸や上方へ廻送する拠点として九浦の頂点に位置づけられた。青森町の町立てでは、1626（寛永3）年に2代藩主津軽信枚が家臣の森山弥七郎に町づくりを命じることではじまった。これ以降の町立ては、第1期として、善知鳥宮を西

近世「両浜」の形成

鯨ヶ沢 大輔

（青森県立 北斗高等学校 講師）

端として、本町・米町・浜町の沿岸部や越前町や安方町が形成された寛永年間（1624～44）、第2期として、塩町・蕨町・博労町・堤川河口部左岸にかけて町立てがなされた万治・寛文前期（1658～68）、第3期として、青森御飯屋と新町・寺町・柳町・鍛冶町の町立てがなされた寛文後期（1669～73）、の大きく3段階に

分けられるという（『新青森市史 通史編2近世』）。青森は、中世以来油川湊などで交易の利権を有していた有力な商人層を排除して、太平洋海運や地域開発の拠点となる近世都市として建設されたのである。両浜のもう一方の鯨ヶ沢は、中世以来、日本海交易にかかわってきており、すでに湊町としての機能を有していた。しかし、日本海沿岸部には、中世に安藤氏の拠点として繁栄した十三や、風待ち湊として古くから全国に知られていた深浦があり、これらの湊町に依存せずに、日本海交易の拠点として整備するために町立てが行われた。

鯨ヶ沢の町立ても、青森同様に3段階に分けることができる。第1期は、漁師町（現・鯨ヶ沢町浜町）や本町といった港湾部の町立てで、中世の湊町部分を基礎とした地域と考えられる。第2期は、新町・釣町・新地町など第一期区画西方の堀切沢方面の町立てで、元和～寛永期（1615～44）ころである。第3期は、第一期区画東方の中村

川にかけての町立てで、慶安～寛文期（1648～73）ころである。興味深いのは第2期である。1615（元和元）年ないし翌年に新町の町立てがなされたのと同時に「鯨ヶ沢堀切之城」が建造されていたのである。この城は、天童山にあった鯨ヶ沢城に比定され、3代藩主津軽信義の弟百助信隆が1635～45（寛永12～正保2）年まで居城にしていたといわれている。つまり、第2期の町立ては鯨ヶ沢城を中心としたものであり、鯨ヶ沢湊の支配の中心地として機能を持たせようとしたと考えられるが、幕府の一国一城令により廃城となったようである。

青森と鯨ヶ沢の町立ての展開を見ると、鯨ヶ沢町では、城を中心とした支配を計画していたことから、青森町に比べて交易の利権を有する商人の影響力が強かったであろう。2つの町を九浦の頂点に置くためには、中世以来の商人をいかに排除するかが重要だったのである。

東京青森会 657号
東京青森会 2023年1月号